

リポート Report

大磯町郷土資料館だより
2009・1・30

29

目次

- 2 開館20周年記念展「Collectibles Oiso」
- 4 大磯とブライトン 第1章 <海水浴>概念の変革
- 6 ちょっとブレイク！／資料館のウェブ情報
- 7 大磯とブライトン 第2章 日本における海水浴成立の布石
- 10 博物館実習生による「島崎藤村が愛した町・大磯」展／資料の寄贈／資料の移管



①



②



③



④

大磯町郷土資料館開館20周年記念展より

- ①Collection 1 - 記憶の大磯 「1,000枚の記憶一絵はがきコレクション」／「大磯風景 海水浴」（明治40～大正7年）
- ②Collection 2 - 生命の大磯 「100体の足跡一動物剥製コレクション」／ハクビシン
- ③Collection 3 - 装いの大磯 「3,000着のくらし一着と仕事着コレクション」／襦袢
- ④開館20周年記念展チラシ

大磯町郷土資料館

開館20周年記念展 2008～2009

Collectibles Oiso

平成20年10月、大磯町郷土資料館は開館20年を迎えました。昭和63年(1988)に開館して以来、「湘南の丘陵と海」というテーマのもとで蓄積した資料や情報は、たくさんの方々のご協力により、小規模な博物館としては屈指の質と量を誇るまでになりました。そこで、収集資料をひとつの大きな成果「コレクション」とみなし、開館20周年記念展「Collectibles Oiso」として3回にわたって展示を開催することにしました。これまでに収集された資料が、当地域の環境や文化の指標として極めて重要な役割を果たしていることをあらためて確認するとともに、20年目を迎えた当館の活動を総括し、新たな第一歩を踏み出すための布石にしたいと思います。本稿では、3回の記念展の概要をまとめました。

■第1回展示/平成20年7月26日～9月15日

Collection 1—記憶の大磯

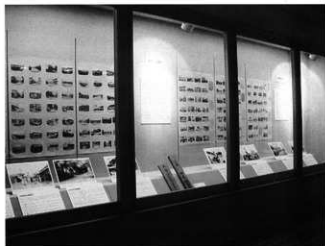
1,000枚の記憶—絵はがきコレクション—

明治期以来、海水浴場として名を馳せた大磯の象徴的資料として、当館では早くから絵はがきの収集に力を入れてきました。そこで、第1回目の展示は、9,000枚に及ぶ絵はがきコレクションのうち、大磯と周辺地域を対象とした約1,000枚に写された明治期以降の景観や人々の様子を紹介しました。

展示では、①「絵はがきの歴史」 ②「大磯の絵はがき」 ③「別荘と町並み」 ④「海と海水浴場」 ⑤「史蹟と名勝」 ⑥「出来事と記念」 ⑦「各地の絵はがき」という7つの小テーマで構成をしました。まず、①で絵はがきの歴史を把握し、②～⑥で大磯および大磯周辺の絵はがきの特徴をまとめました。もともと絵はがきは、戦争、事件、災害、催事などを伝えるメディアとしての役割から発しており、また、建物の新築落成記念や、学校、病院、会社の案内や宣伝を目的としたものが多く作られました。しかし、⑦の各地の絵はがきと比較するまでもなく、大磯町内に限って言えば、海水浴客を対象とした土産用の風景写真が圧倒的に多いのが特徴です。海水浴場の開設にともない、海浜リゾートという新

たな文化を築いた大磯の地域性をうかがうことができます。なお、絵はがきそのものは小さいため、展示ケース内の絵はがきの写真内容を十分読み取ることは容易ではありません。そこで、随所に「絵はがきの絵解き」として、絵はがきを拡大パネル化し、事物や人物に関して「絵解き」風に細かな解説を試みました。

本展示を通して、絵はがきが地域の歴史や文化を視覚的に知ることのできる資料として極めて貴重であることを再認識したとともに、絵はがきの収集にあたって多くの方々からご協力をいただいたことにあらためて感謝申し上げます。



■第2回展示/平成20年11月15日～平成21年1月25日

Collection 2—生命の大磯

100体の足跡—動物剥製コレクション—

平成20年(2008)3月現在、当館では133点の動物剥製を所蔵しています。20年にわたり収集活動を行なった成果が133点という点数に結びついたわけですが、自然史系を専門とする博物館と比較すると決して多い点数とはいえません。小規模な地域博物館では、動物に限らず、植物・化石等様々な地域資料の収集・調査活動が求められ、特定の分野に絞った活動を行なうことが難しいからです。しかしながら、20年間に収集した剥製を目的の当りにし、大磯町をはじめ周辺地域の動物相を概観できる資料群であること、また、希少性の高い資料を含むことなどから多少なりとも評価が得られるのではないかと考えます。

本展では鳥類、哺乳類を中心に脊椎動物の剥製の数々を紹介しています。所蔵している剥製は、特に鳥類が



多く、その数は63科111点を数えます。原資料（へい死体）は町内で拾得したものが約6割です。その他のものは愛川町で拾得したアカショウビン、山北町で拾得したカモシカ等もありますが、大部分は平塚市・二宮町等の周辺地域で拾得したものです。既に完成した剥製を受け入れることもあります。平成7年（1995）に当館に寄贈していただいたアナグマの剥製は、拾得に至るまでの詳細な記録が残されていました。昭和53年（1978）4月3日に大磯町西小磯の城山公園北側の線路沿いで事故死をしていたものを回収し、剥製にしたそうです。本町におけるアナグマの既存資料としては唯一のものであり、地域史資料として大変貴重です。

展示手法としては「動物剥製コレクション」というタイトルのとおり、個々の剥製をゆっくり見ていただくこと、数量を感じていただくことに心がけました。したがって、写真パネル・解説パネルの掲示も必要最小限に留めています。また、脊椎動物に関する調査活動の一端を感じていただくように、ウミガメのストランディング（漂着）調査の結果を紹介しています。

本展示を通して、20年間の活動の足跡を感じていただければ幸いです。ご協力いただきました皆様にはあらためて御礼申し上げます。

■第3回展示／平成21年2月11日～4月5日

Collection 3—装いの大磯

3,000着のくらし—晴着と仕事着コレクション—

現在、当館には衣生活にかかわる資料が3,000点余り収集されています。当館のコレクションの中でも、希少性と充実度では自信のある分野です。そして、衣類の資

料整理にボランティアとしてご参加いただいた方々（平成11年～16年）のご協力の賜物でもあります。

衣服は、人が生活するうえで、無くてはならない基本的な生活用具の一部であり、素材や形態だけでなく衣服にかかわる生活習慣を含めて知ることは、地域を深く理解することにつながります。衣服は一見すると地域性の認めにくい印象をもたれますが、細かく見ていくと、そこには時代、地域、職業など、さまざまな特徴のある情報を見出すことができます。衣服というフィルターを通すことで、地域の暮らしぶりは驚くほど多様な広がりを見せてくれます。

展示では、「晴着と万祝（まいわい）」「仕事着」「再利用された布」の小テーマを設けて構成します。着用の機会が限定されるため機能的な実用性よりも装飾性や演出性の高い晴着、外出着や普段着が古着されて縫い返しや繕いをしていく過程で機能的に工夫された仕事着、古着や古布をさまざまな方法で再生し利用することを前提とした丁寧な針仕事など、そこには古くから日本人が育んできた「もの」に対する日本人の観念が見えてくることでしょう。そして、見直されつつある「もったいない」の儉約精神を実感していただきたいと思えます。



（当館学芸員／佐川和裕・北水慶一）

大磯とブライトン 第1章 〈海水浴〉 概念の変革

海水浴の始まり

大磯は日本の海水浴の先駆的な地であることで知られていますが、海につかる行為（海水浴）は、古代へさかのぼります。ギリシャ悲劇の大家エウリピデス（480BC-406BC）が、「大海は人間の諸悪をそそぎ尽くすと申しますゆえ」と記述し、日本の古事記でも、「幽蹟に出入して、日月目を洗ふに彰れ、海水に浮沈して神祇身を養くに呈れき」[倉野憲司校注, 1963]（伊邪那岐命が黄泉の国に行つて現世に戻ったとき寝ざとして海水につかった）とあります。これら2つの文献とも、身を清める祭司行為のひとつとして、海水に浴したことを記しています。それ以外にも、世界各地の海岸住民は海に馴染み、海に入っていました。

しかし、体系的な「理由づけ」をもとに海水浴が始まったのは1750年からです。1750年に、英国人医師リチャード・ラッセル（1687-1759）【写真1】が海水浴の仕方と効果の研究を発表してから、ヨーロッパ中に海水浴場開設ブームが起こりました。この論文の題名は、「A Dissertation on the Use of Sea Water in the Diseases of the Glands」（「腺病における海水の使用について」）【写真2】です。



【写真1】
リチャード・ラッセル
Richard Russell M.D.
c1760
(NPO My Brighton
and Hove 蔵)

ラッセル医師は、イギリス・サセックス州、ルーイスの村医の家庭に生まれます。外科の開業医の父、ナタニエル・ラッセルのもとで、少年時代から、父の助手として医術を助け頭角を現してきます。その有能ぶりは26歳



【写真2】 [A Dissertation on the Use of Sea Water in the Diseases of the Glands] (大磯町郷土資料館 蔵)

のときに書いた乳癌についての論文が、英国学士院で取り上げられたことから伺われます。その後、オランダのライデンに留学し、「臨床医学の父」と称されるオランダ人医師プールハーフェ（1668-1738）に師事します。ルーイス村に帰国後、父の後を継ぎ開業医となったラッセルは、村から一番近いブライトンの浜辺への療養を患者へ積極的に勧めます。当時、「横隔膜が健康を左右する重大な要素である」と考えられていましたが、ラッセルは、海水に入り海水を飲用することが横隔膜のリンパの流れを改善し、治療の効果があると信じたからです。その時代のブライトンは、度重なる天災で、さびれた漁村でありました。しかし、新鮮な海水を飲用し、浴することを処方するには手ごろな場所でありました。敬虔なクリスチャンでもあったラッセルの師匠プールハーフェは「万物の創造主である神は病気の薬もこの世に残しておいた」と信じ、自らがそれを探るのが医師としての使命であるという信念をもっていました。この師匠の信念を受け継いだ弟子ラッセルも海に治療薬があると考えたのも不思議ではないでしょう。実際、ラッセルは「偉大なる創造主のご意思と御心によって（治癒に）自然が用いられるべく」[Russell, 1755]と信仰心に基づいた信念をこの著書の中であちこちに記述しています。

ラッセルがそれまで以上に海水浴の研究に没頭したのは、オックスフォード大学の医学者のリチャード・フレウインとの出会いがきっかけからです。この出会いを機に、海水浴が今に知られるようになった論文（前述）を、まとめて発表したのです。それが、ヨーロッパ中で一大センセーションを起こしたことで、ラッセルは1752年に王立協会のフェローに選ばれます。翌年には、ケンブリッジ大学から医学博士の学位が授与されました。ラッ

セルの研究の特異点は当時温泉療養・鉱泉飲用が一般的な中、海水療法・飲用を臨床処方に取り入れたことです。「新鮮な海水を飲用し海にひたる」、「皮膚病の場合は海藻で皮膚を摩擦する」、「精神的な病の場合も海に浴す」等々の事例をまとめています。海水浴を新しい医療術として確立したラッセルの診療所は、評判を聞きつけた上流、中流階級の患者が押しかけます。そこで、ラッセルは1753年、ブライトンの浜辺に続く広い敷地を購入し、医院と療養施設を併設した邸宅を建てることになりました。

ラッセルが画期的なのは、18世紀以前のヨーロッパの人々にとって、それまで漠然とした憧憬や恐れだけの「未知の海」と友好的に付き合う方法を医学で確立したからです。一般の人々に対し健康増進・回復という魅力的な「理由」で海水浴をすることを動機づけ、海に対する人々の概念の変革を促すこととなります。その結果、海水浴はヨーロッパ中に爆発的に広がり海水浴を目的とする海浜リゾートが欧州各地に開設されました。

大磯に有縁の地：ブライトン

大磯の海水浴場は松本順によって明治18年（1885）に開設されました。松本順が海水浴のことを知ったのは、自伝によるとワートル著林洞海訳、安政3年発刊の「ワートル著 鉱児業性論」に紹介されている海水浴の項を読んだからでした。当時の蘭学医の間で読まれていた「ワートル著 鉱児業性論」には、オランダ・ハーグ市近郊のスヘフェニンゲン海水浴場のことが記されています。

オランダのスヘフェニンゲンも、英国のブライトンに影響されてできた海水浴場の一つです。オランダは、先にあげたプールハーフェの故郷でもあります。更にブライトンには、岩倉使節団が訪れており、その団員の多くが大磯に別荘を構えました。これらを考えるとプールハーフェ、オランダのスヘフェニンゲン、そして蘭学医・松本順の大磯、という点が線でつながります。このように複合的な事象があいまって、はるか極東の近代日本の大磯にも海水浴をする「理由」が上陸するのです。

海水浴地の変遷

ラッセルはブライトンの医院を開設した7年後に没します。ラッセル死後も海水浴熱は冷めません。1783年に

は英国皇太子がブライトンを訪れました。医師の勧めもあり海水浴をした皇太子はブライトンがお気に入りの滞在地の一つとなり、皇太子も訪れる地としますますブライトンは隆盛を極めたのです。

増大する海水浴客を支えるために新たな雇用も生み出します。中でも海に海水浴客と一緒に入り補助する「ベイザー（男性）」、「ディッパー（女性）」という仕事を地元の漁師やその家族たちが担うようになります。

皇太子のブライトン初訪問から4年後に離宮ロイアル・パビリオン【写真3】が建設されました。モスクを思わせるようなインド・イスラム風の外観、内部は豪華な中国風なインテリアが施される豪華な離宮でした。ブライトンは、ロイヤル・リゾートとなったのです。紳士階級、上流貴族の社交場としますます発展していきます。海水浴地が社交の場として盛んになった様子は、英国の女流作家ジェーン・オースティンの作品でも何度も描かれています。更に1840年代にロンドン-ブライトン間の鉄道が敷かれたことで、都市の人々の海水浴へのアクセスが良くなります。



【写真3】ロイヤル・パビリオン Royal Pavilion

大磯の歩みは、ブライトンと類似している部分が多いことが分かります。大磯も医師によって海水浴場が開かれ、紳士階級が健康増進のために、海水浴に動きます。明治時代のいわゆるエリート達こそぞって大磯に別荘を建設するに加え、当時の人気歌舞伎役者の5代目尾上菊五郎など著名人が療養に來ています。また、初めて海水浴をする客に対して海水浴法を指導する、ブライトンでいうベイザーやディッパーと同様の役割をする、「じいや」という仕事ができます。これは泳ぎが得意な地元漁師の夏場の収入源になります。そして、大磯にも、鉄道がいち早く敷かれ海岸近くに駅がおかれた事で平塚や茅ヶ崎など、後発した海水浴場から一線を画したといえましょう。

現在のブライトン、そして大磯

かつて、ひなびた漁村で人口2,000人も満たないブライトンは、現在、首都ロンドンから電車で2時間弱、人口約21万人を誇る都市に発展しました。ブライトンとその周辺地は、風光明媚で温暖な保養地として退職したお年寄りが余生を過ごしたい場所として人気があります。実際に、老夫婦2人だけで暮らすバリアフリーの平屋の高級住宅地が広がり、町のいたるところにベンチが設置されて、お年寄りが座れるようになっています。海岸には、ゲームセンターのような施設がある埠頭が設置されて観光客が楽しめます。夏には海水浴客の他に、世界中から学生が語学を学びに訪れます。また、環境、動物愛護や同性愛者団体などのNGOやNPOが盛んに活躍している場所としても知られています。海辺の土地特有の進取な気性に溢れるリベラな住みやすい場所だからでしょう。その点でも大磯町も同じことがいえるのではないのでしょうか。

今まで漠然と関係が「ある」と言われてきたブライトンと大磯町の関連性が具体的にここで明らかになりました。

引用文献

①エウリピデス。(1986)。「ギリシャ悲劇 IV」

東京:ちくま文庫

②倉野憲司校注。(1963)。「古事記」東京:岩波書房

主要参考文献

◆Russell Richard.(1755).“The Oeconomy of the Nature in Acute and Chronical Diseases of the Glands” Oxford: printed for John and James Rivington; and James Fletcher.

◆Sakula A.(1995 Feb;3(1)).“Doctor Brighton: Richard Russell and the sea water cure”Journal of Medical Biography. 30-3.

◆Walton John.(1983)“The English Seaside Resort: A Social History”Leicester: Leicester University Press.

◆アラン・コルバン。(2001)。「感性の歴史家」東京: 藤原書房。

◆アラン・コルバン。(1988)。「浜辺の誕生—海と人間の系譜学」東京: 藤原書房。

◆ジェイン・オースティン。(1997)。「サンディトン」東京: 鷹書房プレス。

(当館臨時学芸員/山口由紀子)

ちょっと、ブレイク!

「大磯のお魚たち」展示

資料館の窓の廊下には、「大磯のお魚たち」という展示をしました。お子様の目に少しでも楽しいものをお願い、大きな窓に色とりどりの魚のモチーフを貼りました。

また、大磯港で獲れる魚の種類をランキングにし、魚情報もまとめた参考資料リーフレットも作成しました。現在PDFファイルが、町役場の資料館のホームページ上にあり、ダウンロードできます。更に、「魚へんの漢字を合わせるパズル「ととカルタ」が展示のハイライトです。



資料館 ウェブ情報

おかげさまで1年を迎えた大磯町郷土資料館のブログ「大磯町郷土資料館ノート」も頻りに更新中です。
<http://scn-net.easymyweb.jp/member/oisomuseum/default.asp>
アクセス件数も順調に伸び続けています。更に、資料館関連の参考資料も町役場のホームページに掲載されており、PDFファイルでダウンロードできます。



大磯町郷土資料館 英語パンフレット

http://www.town.oiso.kanagawa.jp/shisetsu/shiryokan/pdf/e_panf.pdf

ひと目でわかる 大磯海水浴場の歴史

<http://www.town.oiso.kanagawa.jp/shisetsu/shiryokan/pdf/kaisuiyoku.pdf>

大磯のお魚ハンドブック

<http://www.town.oiso.kanagawa.jp/shisetsu/shiryokan/pdf/fish.pdf>

郡部文化交流圏 大磯町郷土資料館所蔵資料紹介

http://www.town.oiso.kanagawa.jp/shisetsu/shiryokan/pdf/teien_bunka.pdf

オンラインでもどうぞ宜しくお願いします。

大磯とブライトン 第2章 日本における海水浴成立への布石

岩倉使節団が見たブライトン

ラッセルが海水浴の効能を提唱した『A Dissertation on the Use of Sea Water in the Diseases of the Glands』を著してから120余年後のブライトンを実際に訪れている日本人がいます。幕末期に締結された不平等条約改正への予備交渉及び欧米の国家制度や文明の視察を目的として、明治新政府により欧米諸国に派遣された岩倉使節団【写真1】です。



【写真1】岩倉使節団主要メンバー／左から木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通*
(写真提供：津田塾大学 津田梅子資料室)

岩倉使節団の随員、久米邦武編纂による『米欧回覧実記』に、団員がブライトンを視察した際の記述が見えます。

「ブライトン」府八、「シユルレー」州海岸ノ繁華場ニテ、北緯五十零度五十分、西経零度九分ノ地ニ位シ人口九万零十三人、英倫ノ岔海ニ臨ミ、背ニ平岡ヲ負ヒ、暑寒共ニ温和ニテ、空氣清爽ナリ、海岸ニテ、清氣ヲ呼吸シ、海水ヲ浴シテ、皮膚ヲ收斂スルハ、健全ヲ保ツノ良薬タルコトヲ、或醫師ノ説明ニヨリ、此地ノ繁昌トナレリ、此地近代マテハ、寂寞タル漁蝦村ノ小村ナリシニ、二三ノ病人ノ醫師ノ勤メニヨリ、此地ニ往キ療養ヲナシ、其効驗アリシニヨリ、漸ク倫敦ニ伝稱シ、我モ我モト此海岸ニ遊行シ、其繁昌年逐テ盛ンニ、竟ニ皇帝モ臨幸避暑アルニ至リ、俄然一大都会ヲナシ、家屋ヲ海

岸ニ廣ラスルニ至レリ」¹⁾

文中の「或医師」とはもちろんラッセルのことを指します。この記述から分かるように、当時のブライドンはラッセルの海水浴提唱によって、海水浴場としての発展に成功し、小さな一漁村から英国随一の避暑地へと変貌を遂げていました。

使節団の構成員は、特命全權大使岩倉具視、副使木戸孝允・大久保利通・伊藤博文・山口尚芳を始めとする使節、書記官、理事官とその随員、そして随従者や留学生を含めて総勢108名のほります。

日本の近代化において彼らが果たした役割は計り知れませんが、およそ2年もの間、成熟した西洋文化・文明をまざまざと見せ付けられた彼らが、帰国後日本に与えた影響を海水浴という視点から見てみましょう。

大磯海水浴場開設までの道程

岩倉使節団にはのちに日英同盟の立役者となり、外務大臣を務めることとなる林董（1850-1913）が二等書記官として随行しています。林董は大磯海水浴場を開設した松本順（1832-1907）の実弟で、蘭医林洞海（1813-95）の養子です。

林洞海は小倉の出身で、江戸で足立長尚に師事した後、長崎に遊学し、再び江戸に戻り松本順の実父佐藤泰然（1804-1908）が薬研堀に開いた和田塾で学び、『痘瘍兒業性論』【写真2】を訳述しました。洞海はその後、小倉藩医を経て、幕府侍医に任命されています。



【写真2】『痘瘍兒業性論』安政3年（1856）
(大磯町郷土資料館蔵)

オランダ人薬学者ハンデ・ワートルによる薬物書を翻訳した『笈篤児業性論』は、安政3年（1856年）に刊行されました。この『笈篤児業性論』こそ、大磯海水浴の開祖、松本順が海水浴の効用に着目するきっかけとなった書なのです。

松本順は長崎遊学中（安政4（1857）～文久2（1862）年）に『笈篤児業性論』と出会い、海水浴に関する記述を目にしました。その内容とは巻九「海水」の項、海水の内服及び海水浴の効用、諸症状に応じた海水浴法、内服法などです。

長崎で師事した蘭医ボンベ（1829-1908）から「**歐洲においても、稍々称する者あるも、海岸の善ならざるを以て、行わること稀なり。日本は、環海の国なれば、必ず好所あらん。**」²¹という助言を受けた松本には、もともと実父佐藤泰然の主張する海気礼讃説も念頭にありました。また、『笈篤児業性論』の訳者である洞海自身も虚弱な人に海水浴を勧めており²²、長崎遊学以前に松本はこの洞海から教を受けているのです。

そして、その後には、実弟も参加する使節団によるブライTON海水浴場の発展や欧米諸国の衛生環境に関する情報等も、少なからず松本の耳に入ったに違いありません。こうした経緯により海水浴の効能を確信した松本は、以後海水浴好適地を調査し続け、遂に明治18年（1885）大磯海水浴場開設に至ります。

「**駅中の疲弊甚だしく、その資あるもの多く他に移転し、家あるもの稀**」²³というような状況であった大磯は、松本による海水浴場開設を契機として、明治20年（1887）大磯駅及び松本発案による旅館兼診療所の^{（松本）}橋龍館開業、そして山県有朋、伊藤博文、西園寺公望、陸奥宗光といった政治的領袖による別荘建築ブームの到来もあり、大磯海水浴場は年々繁昌し、「**（海水浴場開設前）の疲勞は全く痕なきに至れり。（中略）富貴の人、地を購ひ別墅（別荘）を営むもの、今なお漸々多く、地価ために騰貴し、旧時に百倍する所少なからず、宜なり、土人の悦び限りなきこと。**」²⁴というほどにまで復興を遂げました。

そして明治41年（1908）には、日本新聞社が公募した優良避暑地の人気投票の結果で、大磯が最高得点を獲得し第1位に輝いた（【写真3】）ことにより、大磯及び大磯海水浴場の地位は確たるものとなりました。



【写真3】明治41年（1908）、日本新聞社によって大磯駅前
建てられた「海内第一避暑地の碑」
（上部「海内第一避暑地」は林董の書）

日本衛生行政の父・長与専斎

松本順の他に海水浴提唱者として知られる人物に長与専斎（1838-1902）がいます。緒方洪庵（1810-63）の適塾で学んだ専斎は、洪庵の勧めで長崎に赴き、医学伝習所や長崎養生所においてボンベや松本順からオランダ医学を学びました。維新後の明治4年（1871）、新政府が創設した文部省に入り、文部小丞兼文部中教授に任じられた専斎は、同年岩倉使節団に加わり、欧米の医療制度や衛生行政を視察・調査します。この体験のうちに専斎が手掛けることとなる日本医療福祉制度として衛生行政の確立に多大な貢献をするのです。

帰国後、専斎は明治8年（1875）から24年（1891）まで内務省衛生局長を務めており、在任中の明治14年（1881）には内務省衛生局によって『内務省衛生局雑誌第34号』が刊行されています。この雑誌には「海水浴説」と題した論文が掲載されており、日本で刊行された海水浴論としては早い時期のもので、その後発表された多くの海水浴論に影響を与えたこの論文は「海水浴の性質」・「海水浴の用法」・「海水浴の療法」の3章から構成されています。これは内務省衛生局長であった専

齋自身の執筆によるものと考えられており、実際翌明治15年(1882)には伊勢二見浦、次いで明治17年(1884)には鎌倉由比ヶ浜において海水浴場開設に努め、成功しています。(ちなみに現在広く使われている「衛生」という言葉も専齋の発案によるものです。)



【写真4】晩年の長与専齋⁶⁾

ここで注目すべきは、国が政策の一環として衛生目的としての海水浴を推奨し、普及に努めていたという点です。欧米先進各国で衛生行政を目の当たりにし、日本を含む東洋においてはその名称さえない状況であることを思い知ら

され、「畢生の事業としておのれ自らこれに任ずべし」⁶⁾と決意した専齋は、ここに至って衛生行政の一環である福祉活動としての海水浴を大衆に広めるため、海水浴場を開設したのです。

ブライトンから大磯へ

300年もの長きに渡り続いた徳川封建社会から脱却して間もない1872年。日本近代国家設立への道を模索し、西洋文化の摂取に貪欲であった日本人の目に、海水浴場としてだけでなく、英国有数の臨海保有地・高級別荘地として名高いブライトンを始めとする欧米諸国の行楽地とそれに親しむ西洋人の姿がいかなるものとして映ったか想像に難くありません。日本における海水浴成立の背景には様々な状況があったのはもちろんですが、岩倉使節団もその一つとして挙げられるでしょう。

宿駅制度の廃止により経済的に疲弊した小さな町は、一人の医師による提唱によって日本全国に名を轟かす一大保養地そして高級別荘地へと変貌を遂げました。一見何の関係もない大磯とブライトン。しかし、東京・大磯とロンドン・ブライトン、またその地形及び自然環境、そして、両者が辿った軌跡など、久米邦武による記述からは類似する点がいくつか見受けられるのです。

また、岩倉使節団には浪浪閣で知られる伊藤博文(1841-1909)を始め、前述の林董、原田熊雄の祖父である貴族院議員原田一造(1830-1910)、神奈川県知事を務めた沖守固(1841-1912)といった、のちに大磯に別荘を構えた人物が参加しています。大磯を代表とする湘南海浜別荘建築は、岩倉使節団の欧米視察が遠因となったと考えることもできるのではないのでしょうか。

このように岩倉使節団の欧米視察は、海水浴だけでなく、近代日本における行楽文化の発展に少なからず影響を与えたのです。

医療としての性格は消滅し、現在では夏に欠かすことのできないレジャーとして広く親しまれている海水浴ですが、自ら海で泳ぐことをしなかった僅か150年前の日本人にとって、現在の光景は想像を絶するに余りあるに違いありません。しかし、ラッセルと同様、松本順を始めとする海水浴啓蒙者たちが、近代国家としての再生後問もない日本に一石を投じたからこそ、今私たちは何の疑いも無く「海水浴」という一つの文化を享受し得ているのです。

引用・主要参考文献

- ¹⁾ 久米邦武編・田中彰校注『特命全權大使 米欧回覧実記(二)』岩波書店 1978 70頁
- ²⁾、⁴⁾、⁶⁾ 小川鼎三・酒井シツ校注『松本順自伝・長与専齋』平凡社 1987 93頁²⁾ 94頁⁴⁾ 94-96頁⁶⁾ 134頁⁶⁾
- ³⁾ 林若樹『集古随筆』大東出版社 1942 193頁
- ⁵⁾ "The Japanese in America" by Charles Lanman (1872 University Publishing Company)
- ⁶⁾ 外山幹夫『医療福祉の祖 長与専齋』思文閣出版 2002 183頁
- ハンデワートル著・林洞海訳『笠置児童性論』旭窓藏 1856
- 内務省衛生局編『内務省衛生局雑誌 34号』有隣堂 1881
- 鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭崎の生涯』東京医事新誌局 1933
- 泉三郎『誇り高き日本人 国の命運を背負った岩倉使節団の物語』PHPエディターズ・グループ 2008
- 石田純郎『江戸のオレンジ医』三省堂 1988
- 小口千明『日本における海水浴の受容と明治期の海水浴』人文地理学会『人文地理』第37巻第3号 1985 23-37頁
- 上田卓爾『日本の海水浴場の始まりについて』静岡英和学院大学 紀要No.4 2006 81-100頁

(当館臨時学芸員/曾根田貴子)

平成20年度博物館実習生による

「島崎藤村が愛した町・大磯」展

常設展示室小コーナーの展示が変わりました。

大磯町郷土資料館では、学芸員資格取得のための実習生を受け入れています。例年、約2週間の実習期間のうち、前半は資料の取り扱いなどの技術を学び、後半には常設展示室の小コーナーの展示替えを実施しています。展示替えは、実習生自らが企画・準備・列品・展示リーフレットの編集などを行なうもので、今回は4大学7人の手による展示です。「島崎藤村が愛した町・大磯」というタイトルのもと、写真や原稿（レプリカ）などの関連資料を展示し、文豪に愛された大磯の魅力の一端を紹

介しています。小さなスペースですが、実習生たちの渾身の展示をぜひご覧ください。



【平成20年度博物館実習生】

資料の寄贈

地区	受入先	資料名
高 麗	曾根田純一郎氏	衣服
大 磯	木村純子氏	昆虫標本 他
	安部川征彦氏	大磯新昇丸模型 他
	古部田鶴子氏	鬼 瓦
	加藤朝治郎氏	藤籠館の火鉢 他
	飯田福信氏	植物写真
	市原 誠氏	終戦時の新聞
	福田 適氏	昆虫標本
	西海榮喜繁氏	柱時計 他
東小磯	佐久間正子氏	アシナガバチの巣
	新見由美子氏	ソロバン（五つ珠）
西小磯	小泉信次氏	果 箱
	波多野正之氏	ダイカイ（デーケー）他
	鈴木 昇氏	神酒徳利 他

地区	受入先	資料名
西小磯	中山和也氏	ミンサザイ
	柳田幹彦氏	古写真パネル 他
	筒井朝子氏	古写真 他
	西小磯社日講中	社日講（地神講）道具
国府新宿	小島祐子氏	アイロン 他
国府本郷	山口 実氏	橋本左内資料 他
	中丸西組念仏講中	念仏講道具
二宮町	西山敏夫氏	古写真 他
平塚市	加藤文八氏	書（断片）
	滝山昭枝氏	衣服 他
伊勢原市	二根木 恵氏	羽子板 他
横浜市	東日本旅客鉄道㈱	レール（大磯駅踏線橋）
	飯島容子氏	掛軸 他
東京都内	森 龍朗氏	鳴立庵資料 他

ご協力ありがとうございました。

資料の移管

機関	受入先	資料名
大磯町役場	財政課	地質調査報告書
大磯町教育委員会	学校教育課	地質調査標本 他
大磯町役場	国府支所	地質調査標本

Report —大磯町郷土資料館だより— No.29
平成21(2009)年1月30日発行

編集・発行 大磯町郷土資料館
〒255-0005 神奈川県大磯町西小磯446-1
TEL.0463(61)4700/FAX.0463(61)4660